

魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名: 田中勤子 所属: 広島市立己斐上中学校 記録日: 2024年 2月 29日
キーワード: 学習用具のデジタル化 それぞれに合った学習方法の模索

【対象生徒の情報】

- ・学年 中学校1年～3年
- ・障害と困難の内容
学習に向かいづらい生徒
集団生活への適応が難しい生徒

【活動目的】

- ・(当初のねらい)
インクルーシブ教育理念に基づき、全ての生徒の学びを保证するための校内支援体制づくり
～ICTを効果的に活用した個別最適な支援の充実を目指して～
(1) 学び方の多様性が認められる環境づくり
(2) それぞれの子どもの困り感に寄り添った学習方法の確立
- ・実施期間
令和5年5月～令和6年2月
- ・実施者
田中 勤子 (専任特別支援教育コーディネーター)

【活動内容と対象生徒の変化】

○生徒の事前の状況

入学後、生徒の実態把握のためにスクリーニングテストを実施し、それぞれの生徒の認知の特性を把握するとともに、それぞれの学級の傾向、学年全体の傾向を把握した。そして、その結果や日常の学習の状態、生活の様子から、支援の必要な生徒をピックアップしている。その結果、校内の約3割の生徒が何らかの支援を必要としている実態があることがわかった。

今年度、支援を必要とされた生徒の中には、学習に集中できない生徒、学習に向かう力の弱い生徒、読み書きに困難が見られる生徒、また、感覚の過敏性があり教室での集団生活に適応が難しい生徒や、対人関係の構築の苦手さから教室に入ることが難しい生徒も存在する。

小学校で学習した漢字が定着できていないため、「漢字が読めないから書けない」「漢字がどう書いてあるかわからないから書かない」と、授業への参加をあきらめている生徒がいる。授業中、机に伏せていたり離席をしたりするなど、落ち着かない様子も見られる。

また、黙読が難しく、声にして音で確認しながら文章を読む様子が見られる生徒、教室全体への指示が理解できず、周囲の生徒の動きを見てから行動している生徒も複数存在する。

○活動の具体的内容

(1) 学び方の多様性が認められる環境づくり

① 啓発学習の実施

学年ごとに学年集会を持ち、他者との違いを認めること、感覚の違い、合理的配慮について、共生社会の形成に向けてのインクルーシブな集団の大切さについて伝えた。(資料1)



(資料1)

「NHK for School」が提供している2分のアニメシリーズ「ふつうってなんだろう？」を用いて、感じ方や感覚の違いに気づかせ、それぞれの違いを認め合い、支え合うことの大切さを伝えた。

学習についても、自分に合った学び方を選択し、自分らしく学ぶべきであること、困り感に合わせた配慮を要求することの公平さや、自分自身で権利やニーズを主張すること（セルフアドボガシー）の大切さを伝えた。

② 定期テストにおける合理的配慮の実施と周囲への理解の促し

定期テストについての合理的配慮（別室での受験、読み上げ、時間延長）についての説明を学級で行い、合理的配慮への理解を促した。

③ 自分に合った学習方法の選択肢を増やすために

対象生徒が所属する学年に対して、自分に合う学習方法について話をした。「紙媒体（教科書）を読む」「電子データ（電子教科書）を読む」「読み上げを聞きながら読む」など、どの方法が一番内容を把握しやすいか選ぶ体験をさせて、自分に合う学習方法を考える機会を設けた。

また、デジラー教科書、学習アプリの紹介もを行い、自分の苦手さを補うiPadの活用方法を紹介し、希望者に学習アプリが多数インストールされているiPad miniの使用を勧めた。

④ 校内研修会の実施

読み書きを助ける補助具としてのiPadの活用について、教員向けの研修会を開いた。授業中、ニーズのある子どもたちが、それぞれの学習方法としてiPadを活用していくには、教室の中でそれを支える指導者が必要であると考え、職員間で研修の時間を持ち、iPadが持つ機能やiPadの設定と使い方について研修した。

⑤ 保護者への啓発（PTA講演会の実施）

今年度、保護者へのインクルーシブ教育への理解を促すために、PTA講演会を実施した。保護者の学習の機会を持ち、インクルーシブ教育の大切さ、環境整備と合理的な配慮について、自他を認める家庭環境の大切さについて理解を深めた。

(2) それぞれの子どもの困り感に寄り添った学習方法の確立

① 実態把握

新1年生全員に対して、スクリーニングテストを実施し、それぞれの生徒の認知の特性を把握するとともに、それぞれの学級の傾向、学年全体の傾向を把握した。その後、校内研修会を持ち、スクリーニングの結果からのアセスメントを行い、学校全体で情報を共有した。

スクリーニングテストでピックアップされた生徒については、個別の指導計画を作成し、その後の授業の様子を特に注意して観察していった。学習に集中できない生徒、学習に向かう力が十分に身につけていない生徒、読み書きに困難さが見られる生徒に対して、授業中の学習の様子やテストの誤答などからその困りの要因を探り、その手立てを検討していった。個別の指導計画に、実施した具体的な手立てとそれに対する評価を記入していった。

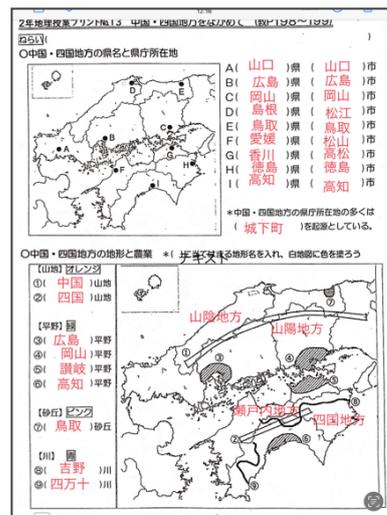
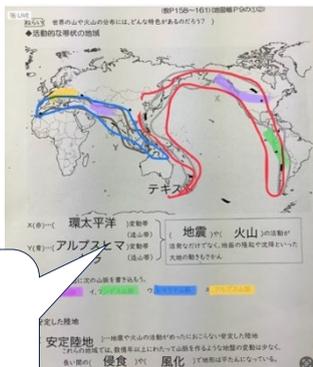
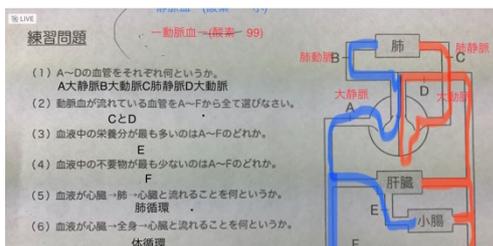
② リソースルームでの個別対応

授業中、学びにくさが見られる生徒を対象に、リソースルームにて個別授業を行う時間を設けた。各々の生徒のつまずきの状態を把握し、対象生徒とともに課題を整理してその解決方法を模索した。「今、困っていること」を確認し、つまずきの要因に対して、ポイントを絞ってアプローチし、教室の授業での困り感の軽減に努めた。

それぞれの生徒が個々の特性に合わせてiPadを自分の学習手段として主体的に活用できるよう導いた。

・ワークシートのキーボード入力

授業中、ノートテイクが苦手な生徒に対して、キーボードを使ったノートテイクを提案し、ワークシートを iPad のカメラで写し、「写真」で編集し、「テキストを追加」でキーボード入力できるように個別に練習した。自宅で iPhone の入力に慣れており、入力速度が高いフリック入力を選んだ生徒もいた。(資料2)

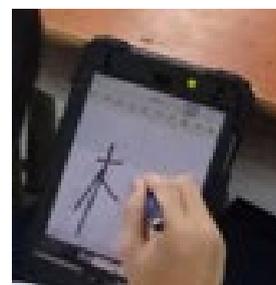


予測変換を上手に使い入力の速度が上がった。色を変える等の工夫も見られる。読めない漢字は、Google アプリの読み上げを聞き、入力できるようになった。

(資料2)

・アプリ「筆順辞典」を使って

漢字の基本的な運筆の仕方がわからず、どこから書くのかわからない様子が見られる生徒に対して、アプリ「筆順辞典」を使った学習を行なった。漢字の運筆のガイドを使って、漢字を練習した。「こんな書き順だったのか・・・」と、何度もガイドに沿って漢字を書いていた。(資料3) その後、筆順の基本的なルールがわかり、漢字を書くことへの抵抗がなくなったため、漢字テストに自分から挑むことができるようになった。



(資料3)

・理科の小テストに向けて

元素記号や化学式をアプリ「Bits Board」の Memory Cards を使ってゲームを楽しみながら暗記することで自信を持って、小テストに臨むことができた生徒もいた。

・「平家物語」の暗唱テストのために

「平家物語」の暗唱テストに向かうための工夫として、「平家物語」の覚え方を検索させ、生徒が興味を持てるものを選ばせた。イメージがアニメーション化され、冒頭部分にメロディがついたものを選ぶことで、歌を覚えるようにして暗記した。

・「読み」の苦手な生徒に対して

読んで内容を理解することが難しい生徒の個別指導では、写真に撮ってテキスト選択から「音声読み上げ」を使い、聞きながら読んで理解することを勧め、教室での学習時に一人で行えるように練習した。また、小テストの前など暗記が必要な時には、アプリ「単語帳」を使い、音声を聞きながら暗記する方法を紹介し、今までの学習方法と比較しその効果を生徒とともに確認した。

③ 教室における支援

・デジ教科書の活用

国語、社会、英語の教科書を希望者の GIGA タブレットにダウンロードし、教科書の内容の把握の方法の選択肢を増やした。新しい単元に入る時、本文の朗読を聴きながら教科書を読む活動があったが、長い文章を、集中して読むことが苦手な生徒には、授業ごとに設問に合わせて狭い範囲の内容を把握できるよう教科担任の示した範囲を、音声読み上げを聴きながら内容を理解させ、文中から答えを探すように導いた。

・「書き」の苦手な生徒に対して

ノートテイクの際、黒板と手元との視線の往復が多い生徒には、自分で iPad を使って写真を撮り、手

元で手本にして書くことを勧めた。また、手指の巧緻性に欠け、物差しを使って作図することが難しい生徒には、iPadで写真を撮り、写真の編集でiPad内の物差しを使って作図をする方法を紹介した。

④ 教室の授業に参加しづらい生徒に対して

授業中、周囲の生徒の音が気になり教室で過ごすことが難しい生徒に対しては、ノイズキャンセリングヘッドホンを使うことを勧め、実際に使用して効果を確認した。その後、日常的に継続して使用することはなかったが、ノイズキャンセリングヘッドホンをいつでも利用できることがわかると安心した様子が見られた。

クールダウンが必要な生徒に対しては、リソースルームにクールダウンのスペースを設け、利用を促した。気持ちが落ち着くのを待って、対象生徒が自分の思いを話し伝えられるよう促した。その際、アプリ「Simple Mind」を用いて、話し伝えにくい気持ちを発する言葉（単語）を聞き出しながら言葉を繋ぎ、生徒の気持ちに共感しながら、具体的な解決の方法を一緒に考えるよう努めた。

日常的に教室に入ることが難しい生徒に対しては、生徒の状態に合わせて、別室での学習方法を本人と相談しながら、能動的に選択し取り組めるようにしてきた。希望があれば、教室の授業にオンラインで参加できるようにしたり、別室で課題に取り組みたい生徒には、他の生徒のノートや作品をGoogle Classroomにアップし、共有できるようにした。

⑤ 登校しないことを選ぶ生徒に対して

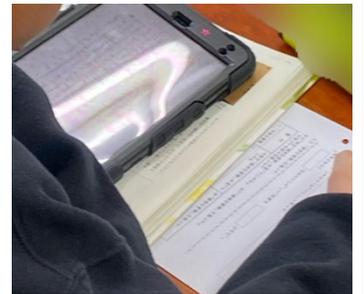
登校しないことを選択し、家庭で学習を進めたい生徒に対しては、他機関との連携を図りながら、生徒の状態を丁寧に把握することに努め、本人や保護者の希望に合わせ、学習内容や教材を設定した。本人が「できた」と感じられるための行動を増やしていけるように、主体的に取り組めたことに対して肯定的な評価を行っていった。本人の希望がある時には、自主学習のための動画サイトを紹介したり、Google Classroomで本人と担任のみが繋がれるクラスルームを作り、そこで情報の共有を行なった。

○生徒の事後の変化

(1) 「目標(1) 学び方の多様性が認められる環境づくり」について

① みんなと違う学習方法に対する抵抗の軽減

GIGAでタブレットが生徒全員に配布され、授業中の活用が進んできているが、授業の展開の中で、情報の検索や共有、他者との意見の交流など、全員が一律に同じ使い方をしている場合がほとんどであった。そのような実態の中で、自分だけが違う学習方法への抵抗を見せる生徒も見られた。個別学習でその効果を実感しているにもかかわらず、周囲の生徒から何か言われるのではないかと、バカにされるのではないかと、教室での活用を拒む生徒もいた。



(資料4)

しかし、取組を進める中で、その効果を実感し、自分の学習方法として授業中にも使いたいと前向きに教室での活用を始めた生徒が見られるようになった。(資料4) 周囲の生徒からはとても自然にそれを受け入れている様子もうかがえた。

② 学習方法を模索する生徒の現れ

自分の学習方法について、どんな学習の仕方が自分に適しているかを考え、試してみようとする生徒が出てきた。既に活用している生徒のタブレットを手にして、デジタイズ教科書を音声で聞いてみたり、「僕も使ってみよう」と希望したりする生徒が出てきた。現在、2学年の生徒60名の中で6名の生徒が使用を希望し、使い始める生徒が出てきている。

また、自分から板書を写真に撮って、それを見ながらワークシートを記入する生徒の姿も見られるようになった。教科担任と相談しながら、学習ワークのページをiPadで写真に撮り、そこにテキストをキーボード入力して提出する生徒も出てきた。

(2)「目標(2) それぞれの子どもの困り感に寄り添った学習方法の確立」について

① 学習意欲が高まった生徒の現れ

第1期と第2期の成績の比較では、評定が合計4段階以上あがった生徒がいた。漢字を書くことに苦手意識を持ち書くことをあきらめていた生徒であったが、キーボード入力や漢字の音声読み上げを行ったことで学習意欲の高まりがみられる。音楽の歌のテストや英語のインタビューテストにも準備をして臨むことができた。進路についても進学を前向きに考える様子も見られるようになった。

② それぞれの場所での学びを保证する

リソースルームや別室を居場所として、そこでの学習を継続できている生徒も見られる。また、リソースルームや別室を利用していた生徒が、教員の生徒に寄り添った対応により、学級集団に戻ったケースも見られた。

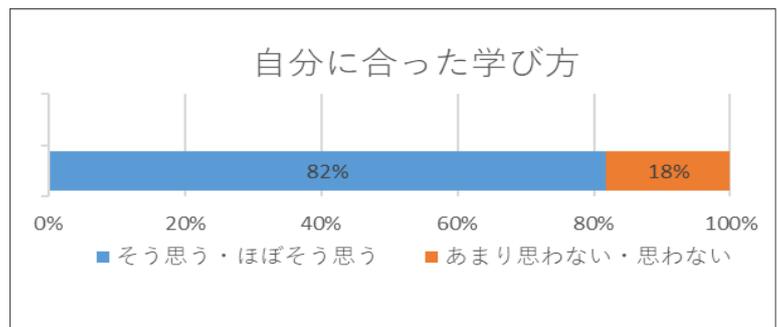
今年度、欠席日数が30日を超える生徒は全体の4.2%見られるが、全休の生徒は見られない。自宅で学習を続けている生徒との関係が途切れることのないよう、それぞれの生徒の状態に寄り添った対応をしてきたことで、自分の状態に合った学習ペースを掴んでおり、行事への参加、部活動への参加、学習成果物の提出など、それぞれのペースで登校した。学校がコミュニケーションの場として、それぞれの生徒の中に位置づいていると感じる。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づきとエビデンス

・お互いの違いを理解し、お互いの学習方法の違いを認めながら、自分に合った学び方を見つけようとしている生徒が増えた。

資料5は、今年度12月の終わりに全校生徒対象に行ったアンケートの結果である。自分に合った学び方を見つけていると感じている生徒が8割を超えている。(各教科の平均)



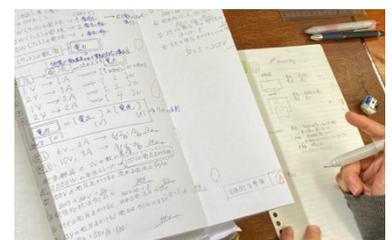
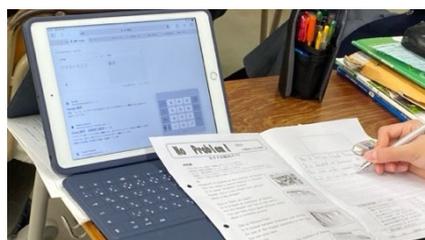
(資料5)

また、資料6は、生徒が教室で定期テストに向けて自主学習をしている様子を撮影したものであるが、それぞれの生徒が自分に合う方法を選びながら学習している様子が見られる。

iPadのアプリを使って暗記している生徒、iPadの動画サイトを利用して理解を深めている生徒、翻訳アプリを使って英作文の確かめをする生徒、紙媒体の学習ワークに取り組む生徒、紙媒体の単語カードで暗記する生徒などが同じ教室の中で学習している。色々な学習方法をお互いに認め合うことができ、尊重されている様子が見られる。

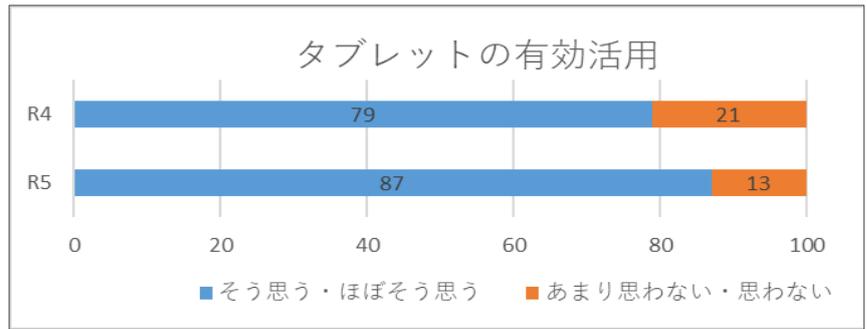


(資料6)



・タブレット端末を学習に有効活用できていると感じる生徒が増加した。

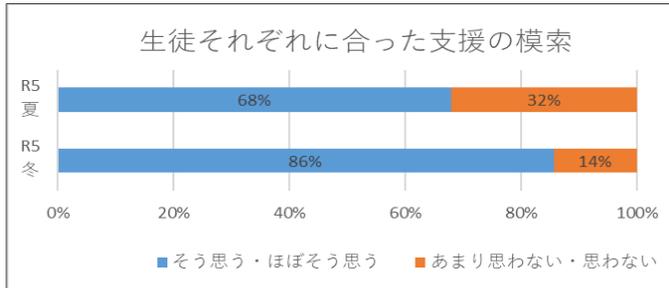
資料7は、タブレット端末を学習に有効活用できていると感じている生徒の数の昨年との比較である。昨年度の79%から今年度は87%まで増加している。



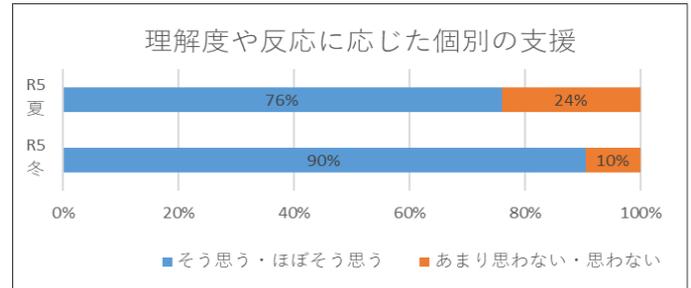
(資料7)

・それぞれの子どもの困り感に寄り添った学習方法を確立しようとする教員の意識が高まった。

資料8、9は、教員対象に行ったアンケートの結果である。今年度の7月と12月の結果を比較すると、2つの項目において、どちらも肯定的な自己評価が増えている。

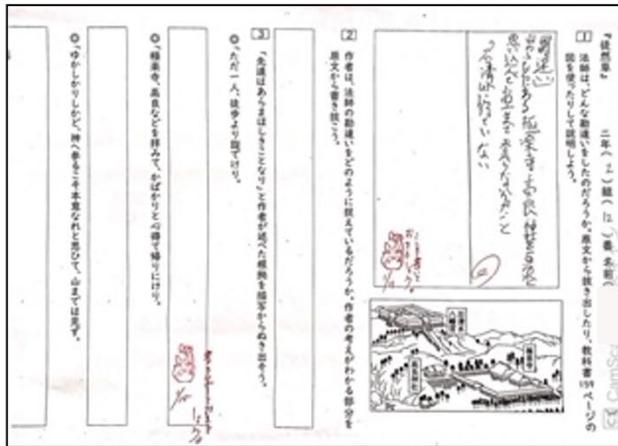


(資料8)

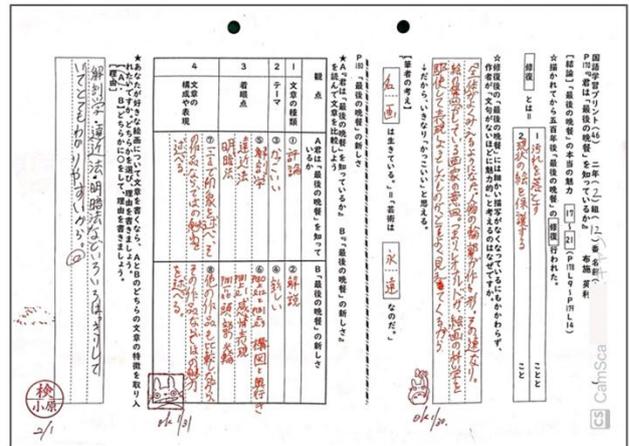


(資料9)

・対象生徒が自分に合った学習方法や集団参加の方法を見つけ、学習意欲や自己肯定感を高めることができた。



(資料10)



(資料11)

資料10、11はある生徒の国語のワークシートである。資料10を書いた頃は、学習の内容が理解できず、ワークシートに記入する意欲もなくしてきている状態が見られていた。

資料11はiPadで音声読み上げを聞き、教科書の内容を把握しながら、自力で設問に答えたものである。手を挙げて発表する姿も見られ、自信を持って学習に参加できている姿が見られるようになった。こうすればできるという方法を見つけたことで、自己肯定感が高まり、授業中の表情や学習に向かう姿勢に変化がみられた。